

1981.1.31

第一子誕生

私は君に出逢えてたいへん幸せです。娘へ父より

教育

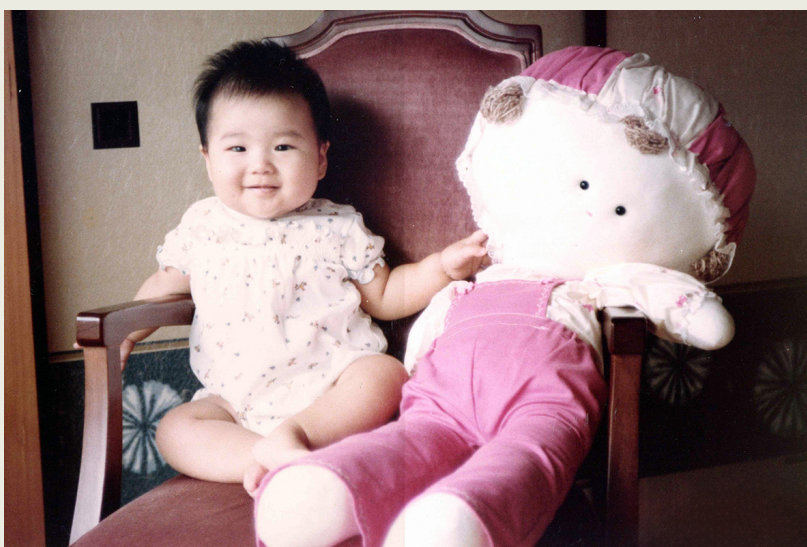
新宝島

1月特典

向山洋一教育資料

No 14

2025
JAN.



(生後7ヶ月の恵理子 1981)

本資料について

アニャンゴこと向山恵理子さんは、ケニアで最も有名な日本人だ。

2005 年、単身、ケニアの首都ナイロビから、夜行バスを乗り継いで 10 時間、ヴィクトリア湖の近くにある電気も水道もない小さな村に住み込んで修業をし、世界で初めて女性として、伝統弦楽器ニャティティのソロ演奏家となった。

世界中で、ニャティティの演奏をする傍ら、日本ケニア文化親善大使として、日本とケニアの小中高校で公演を行っている。アニャンゴは、向山氏の一人娘である。

教育には、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」の三分野がある。

向山型国語、向山型算数に代表される膨大な授業実践。教育技術法則化運動、TOSS、日本教育技術学会、向山洋一教育賞の創設。そして、アニャンゴ。

向山氏は、「学校教育」「社会教育」「家庭教育」のすべてにおいて、日本教育史に大きな足跡を残した。

1981 年。向山氏は、第一子の誕生にあたり、父親としての覚悟とわが子へのメッセージを『学級通信ランダム』に次のように記した。

「男の子と女の子とどちらがいいですか」と聞かれると、私は次のように答えるようになっていた。
「どちらでもいいです。どちらがいなんてうまれくる子に失礼です」

「五体満足ならいいわよね」と言われると、次のように答えた。

「五体満足でなくてもいいです。どのようにうまれてこようと、私は父親なので、すべてを受け止めるつもりです」

病室で向山氏は、出産日記を見つける。陣痛からの経過を 4 ページ書き足した後、向山氏は

私は君に出逢えてたいへん幸せです。
娘へ、父より

と結んだ。

本冊子には

- (1)向山洋一『学級通信ランダム No.15』
調布大塚小 5 年 1981
向山実物資料 A116-05-01-15
- (2)向山洋一『学級通信ランダム No.16』
調布大塚小 5 年 1981
向山実物資料 A116-05-01-16
- (3)向山洋一『学級通信ランダム No.23』
調布大塚小 5 年 1981
向山実物資料 A116-05-01-23
- (4)向山浩子『学級通信ランダム No.90』
調布大塚小 6 年 1982
向山実物資料 A117-06-01-90

他、が掲載されている。

なお、解説は水野正司氏である。

学級通信

ランダム

第一巻 (NO 1 ~ NO 50)

1980・7・11 ~ 1981・5・26

自歌

向山洋一 前途有望
眉目秀麗 才氣煥然
研究熱心 授業優秀
粉骨碎身 一心不乱
新進気鋭 前途有望

反歌

向山先生 前途有望
御矢真暗 矢行不安
出腹不目 愚鈍無能
空理空論 不得要領
無暗乍饑 青息吐息
諺序脱与 常如新聞
最低基準 檀舌凶論
起立少数 否決却下
哀音切々 宸怒察々
自華自得 辱概無量
満場一致 三組一回

東京都大田区立調布大塚小学校六年三組

ランダム

No 1415
(1981.2.2)
藤村あさ子通信

カーネーション

◇ 教室に入ると黒板に「先生おめでとう」と大きく書いてあった。「赤ちゃんおめでとうございます。立派な人に育ちますように…」「三組一同」とも書いてあった。それを読みあげると男のどの何人かは、「一同とはおかしい。」「ぼくは入ってないよ。」「祝ってないよ」と言った。「そうか、一同ではなく有志ということか。有志のみなさん、ありがとう」私は礼を言った。

大きいそでで、展覧会の後片づけをした。そして、赤ちゃんがうまれることについて話した。陣痛の痛みの大きいこと、その痛みによって赤ちゃんの出口の子宮口が開かれること、それはやがてマシユマロみたいになやわらかさになること、赤ちゃんの方も頭の骨が重くなってお母さんと協力しなくてはならないこと、陣痛は母親と父親が協力した方がいいこと、みんなが大人になったら、そうしなさいというようなことをである。

◇ 子供ができたときから、女房は人工添加物の入った食品を極力避けるようになった。私もタバコを止めた。(これは、他にも理由があったが…) 病院は、できるだけ自然に出産をさせる方針をとっていた。陣痛の痛みをやわらげるのに、ラマーズ法という呼吸法を教えてくれた。こうした方針に私は賛成であった。

ところが、夫である私も出産に立ちあい協力しなくてはならない。私はこの方針には反対であった。というより逃げ腰であった。病院にたのみはなしの方がいいなあなんて考えていた。それでも女房にひっぱり出されて、夫婦の出産教室に行った。夫婦が7組いた。私はそこで出産のしくみを知った。陣痛は何のためにあるのか、どのくらい続くのか、どうすればいいのかなどをである。見通しを持ったことによって逃げ腰がすしひっこんだ。

◇ 1月27日、番町小学校であった都教育研究員の研究会から夜おそく帰ると女席の陣痛が始まっただけだった。明け方病院に電話した。5分おきになっていた。車をつれていき診察してもらおうとまだまだとのことであった。

翌8日も陣痛は続き、女席は寝ていた。私はどうしてもはずせぬ研究会があり（私に原稿を見てもらいたいと意く立川の方から来る先生がいた）、もうろうとした顔で出席した。^{その夜も}陣痛につきあった。

翌29日も、陣痛は続いた。でも、ぶつうに生活していた。私は夜のNHKの番組編成会議を欠席した。30日朝、病院に連れていき入院した。子宮口は7cm太とのことであった。40周年記念式と祝賀会のため私はひきかえした。

この日にばつかったらどうしようとも毎日と前から言っていた。

◇ 女席と赤ちゃんの陣痛を共にしながら、私は私がかわっていくように思えた。「男のうと女のうとどちらがいいですか」と聞かれると、私は次のように答えるようにになっていた。「どちらでもいいです。どちらでもいい人とうまいてくるうに失礼です。」

「五体満足ならいいわよね」と言われると、次のように答えた。「五体満足でなくてもいいです。どのようにうまいてこようと、私は父親なのですから、すべて受けとめるつもりです。」きざり表現だが、私は心の奥底からそう思った。「どのようにうまいてきてもいい。私が父親なのだ」と……。

◇ 長い陣痛の末、けっきよく帝王切開でうまれた。^{（その緒が）}首に二重にききついていたからである。しかしこの陣痛は、親と子どもにとって大切なことだったと覚えている。母と共に経過は順調である。

病室を整理していると、女席のお産日誌があった。私は初めて目にした。陣痛からの経過を四ページ、私は書き足した。上に書いたような内容もつけ加えた。

そして、「私は君に出逢えてたいへん幸せです。娘へ、父より」と結んだ。

「娘へ、父より」と書く時、胸の底から身体全体を駆けめぐらうように、ずしーんとしたふるえを感じた。

ランダム

No.16
1981.2.6
503通信

オ-3誕生 その2. 名前考

- ◇ 男の子どもだったら太郎、女の子どもだったら花子と子供たちに言ってあった。しかし、どうも「花子」というわけにいかないらしい。

女房が退院して、ゆっくり考えてもらおうかと思っていたら、世間はそれを許してくれなかった。扶養手当をもらう以上、「何の何かし」という名をコンピューターに入ねなくてはならないらしい。くうまれたのは事実ですから」という届け出は、コンピューターは理解できないらしい。

2週間で届け出なくてはならないぞうだし、7日目に命名希望という紙を貼るらしい。女房には「サボッテイル」といわれるし、まわりの人からは「名前は何？」と言われてこのままの事態を続けることは許されなくなった。

- ◇ 名前を考える上で、いくつかの原則を考えた。

一つは、親とあまり関係のないもの

一つは、文字にあまり意味のないものである。

ところが、これが大変だった。まず、大すじとして、「子」がつくものと「子」がつかないものが考えられる。迷った末に「子」がつかない基本方針をたてた。

今までに会った人やことばのひき^びから、「かほり」「かみり」「ゆかり」「みゆき」などという名前を考えた。

大仕事をしたような気持ちだった。

- ◇ これを女房に提案すると、「全くダメ」というのである。女房は「基本方針」として「子」のつくものがいいというの

だ。平凡な感じの名前で、音のひびきがいい^{その}というのだ。
あげくの果に、「あなたは、何も考えてないんだから」とや
られた。

世間の風も、女房に賛成が多かった。男の側の、子供た
ちにアンケートをとったら、圧倒的に「子のつく名」の賛
成が多かった。私は「基本方針」~~を~~^を変更せざるをえなかった。

◇ 参考のためにと、調布大塚の子どもたちと親たちの名前
を全部見た。男と女の名には、明白な特徴があった。

男の名前はいろいろだった。千差万物・十人十色・絢爛
豪華・適材適所・曖昧模稜といった風だった。女の名前は
単純だった。简简单单・同質同一・一衣帯水・一山一田・
少数激戦といった風だった。

男の場合は、いいかげんにつけてもいいのである。例え
ば「先生→さきみ」「教室→室教→むろり」である。

女の場合は、そうはいかない。しるべき文字が決まっている。

◇ 私は、何となくいいかげんに次のような名を考えた。

みえこ → 美枝子・美恵子	たかこ → 敬子・隆子
りえこ → 理恵子・	りょうこ → 涼子
えりこ → 恵理子・絵理子・江梨子	まちこ → 真千子
みちこ → 美智子	ともこ → 昭子・知子

子どもたちのアンケートでは、〈えりこ〉〈まちこ〉〈みえこ〉などが多かった。
ともろは、弟の子ども名前だからよしておこう… などなどの理由で、けっきょく
〈えりこ〉〈まちこ〉〈りょうこ〉が候補として残った。〈まちこ〉は、〈まうやま
まな〉で、ままと続く。〈りょうこ〉は、女を小く書かなくてはいいからたいいんだ
(おろの意)などで、けっきょく、〈えりこ〉と決った。

◇ 私は責任を畢してほしかったのであるが、出産2日目の事を思い出
した。帰り際に女房は私にこう言ったのだ。「あなた、名前を考えてきて…。例
えば、〈えりこ〉ちゃんかとうかしら…」

この日、も帰り際にこう言った。「字はどうでもいいわ。まかせます。例えば、恵理
子ちゃんかとうかしら…」 私は一瞬、父親として何をしたら好都合か。

ランダム

23
No. 17
1981.4.24
調布大塚小3

<明日は筆田下校です>
<まよひは検査はありです>

恵理子(三ヶ月)

- ◇ 学級通信をもっと発行してくれと申し込まれた。前の担任の時は三百何十号が出たのだが、その時のことを体験している人に言われたのだ。

もちろん、そんなには出せないが、せめて50号、いや欲ばって100号まではがんばろうと思う。

お断わりしておくが、私は自分で好き勝手に出しているのである。「クラスのために」などと、ほとんど考えていない。従って、独断と偏見に満ちた内容である。気に障る方はすてて下さればいいし、健康に悪ければ申し出てくれれば良い。私は即座に発行を停止し、乾杯をする。

- ◇ 恵理子が誕生してもうすぐ三ヶ月である。夜中に起きて彼女の食事中、つきあうのにも慣れた。(今日は夜中の1時半に起きて、寝れぬため最近発行の「表記法辞典」に目を通し、寝たのは4時半であった。)

この間、私どもが気をつけたことは、大きな点でいうところである。

カミは、できる限り母乳で育てようという事である。これほど、うちのカミさんの様子から絶望していたのであるが、カミさんはよくがんばっている。近ごろ授業が始まって、水曜日は、武蔵野美術大学と社会事業大学へ行くため、乳がほって死ぬ苦しみを味わうらしい。カミは、テレビ・ラジオの音は一切聞かせないというこ

とである。今まで部屋に置いてあったテレビを他の部屋に移しかえた。女房は「少しぐらいいいでしょう」と言ったが、私は一切妥協しなかった。

お袋は階下にいるのだが、お袋にもこのことは頼んだ。恵理子がいる時は、テレビを消してもらいたい。又は、イヤホンで聞か、音を消してもらいたい--と。テレビはどれほど音があるかをお袋はいつも聞かさせているせいか、協力してくれている。

丘よりの聳しみを奪ってしまうように心苦しい。しかし丘よりと一帯にテレビを置くと見えていいは、置くと不幸になるのだ。あらゆる研究が、動かしたい結論を出しているのである。孫がいない時に充分見ておいてもらうほかはない。

不思議なもので、テレビを移してから、私とカミさんはほとんどテレビを見なくなつた。見るのは、自分が関係しているNHK木.8:00~8:50の「クイズ、面白ゼミナール」だけである。うちのカミさんは、家で仕事をやる時、ほとんどつけっぱなしだったから、大変な変化である。

力るは、できる限り言葉をかけてやるということである。人間は人間によってこそ、本当に人間になる。経験とも思える長い長い努力によってこそ、人間の働きかけによってこそ成長するのである。

人間が手を尽すのは、「養う」とでもいうのだろうか。毎日くり返される働きかけである。これで手をぬくと、必ずあとで借りを返さなくてはならなくなる。

能率よく教えたのは、やりもどしが必ず果るのである。赤ん坊にとっては言葉かけ、そして泣いた時の不快感の除去である。泣けば、不快感をとりのぞいてくれる(吃腹かおめか病気)経験によって、初めの人間の感情が育つという。〈新多野代の著書にある〉いつまで泣かせておいていいわけがない。

昭和55年9月19日(金) 内外教育 第3種郵便物認可

がどの学校でも必ず何人かいるもんですね。だ
けど、水に浮かないのはやはり教え方の問題。う
つむいて息をとめる訓練をやらせ、水の中でも同
じことをやらせる。必ず浮きますよ。やってみて
二、三十分で本当に浮くようになったんです。
今、この学校では五年生百八人のうち、二十五メ
ートル泳げない子供は二人です」

ツボを押えて教える工夫が必要ということだろ
うか。そのためには、やはり教師の教育に対する
情熱と努力が要請されてくる。

「掛け算を間違える子供をみていますと、いろ
いろなところでひっかかるようですが、最後に足
し算をする時に、位取りを間違えて足している例
が多いのです。そこで、いつも子供にいうん
です。定規を使って真つすぐ線を引くようにしな
さい、と。それができる子供は間違いが少ない。だ
けど中には、いくらいっても真つすぐ線を引か
ない子供がいる。どうしてでしょうね」

四〇五割は親の責任

ところで、子供の教育は学校、家庭それぞれに
責任があるはず。教育のことは学校の責任とい
う考えが父母の中にあるが……。

「感じていることの一つですけど、テレビの視
聴時間が長い子供は忘れ物が多く、持続性も弱い
ですね。そして、勉強の方もだんだん落ちていく
傾向は確かにあります。時には十一時間もテレビ
を見ている子供がいるというから、全く驚きで

す。こういうのは、やはり家庭の教育に問題があ
る。家庭の中にちゃんとルールがあって、教育が
行われている場合には、子供にも持続性がありま
すね」

なかなか簡単にはいえないかもしれませんが、
子供の教育について、一体、親はどれくらい責任
があるものでしょうかね。

「四〇五割は親の責任だと思います」——とズバ
リ。ともかく、教師も父母も子供の教育に責任を



持つためには、学校と家庭の間に意思の疎通がな
ければならぬ。おそらく、学級通信を出している
のもそのためだろう。

「かつて週三回、『学年通信』を発行したことが
あります。なかなか大変でした。この七月からは
『五ノ三(五年三組)学級通信(ランダム)』を出
しました」

差し出された通信の創刊号(一九八〇年七月十
一日付)を見ると、冒頭にこう書かれている。

「何人もの母親から便りをいただいた。『ラン
ダム』はそうした気持ちに答えようとしたものであ
る。学級通信を発行するといっても、ことし一年
かなり殺人的な忙しさであり、定期的に発行する
わけにはいかない。よって通信を『ランダム』と
名付ける」と。こうして学校と家庭は緊密化して
いく。ことしの夏休みには、夏休み学年行事「親
と子の持ち込みバイキングとお楽しみ会」を学校
で開催、好評を博したそうである。

「子供たちにメルヘンの世界をという念願から
お菓子の食べ放題をやったわけです。食べ終わ
ったあと、みんなでゲームなどしてと、そんな楽
しい世界を子供は夢見るものです。そんなことぜ
ひやってみたい、とかねがね考えていました。お
かげさまでお母さんがたも、実によく協力してく
れましてね。ポルトガル人を母に持つ子供がいる
のですが、このお母さんもお菓子をつくってきて
くれました」

本当に楽しさでいっぱいといった感じ。話を聞
きながら、『ランダム』の創刊号をふと見たら、
「いかなる学習にとっても大切なことは二点——
『ていねいさ』と『持続性』である」と書かれて
いるのに気がついた。この人の持論である。

こうしたユニークな考えを「斎藤喜博を追っ
て」と題する著作にまとめたという。昭和十八年
九月十五日、東京都生まれ。四十三年東京学芸大
卒。大田区大森第四小を経て五十年四月から調布
大塚小へ。

(今星 仁二編集委員)
……通信「内外教育」

1980. 10. 2 No. 10

昭和55年 9月19日 (金) 内外教育 第3種郵便物認可

なまはるうたム

日本中から跳び箱を跳べぬ子をなくそうと
問題提起する東京都大田区立調布大塚小の

向山 洋一教諭

跳び箱を跳べない子がクラスには何人かいるものだ。しかし、だれでもできると、実際に跳べるようにしたそうですね。

「はい、十五分で跳べるようにしたことがありますよ」

と自信をもって語る。

それはまた、どうしてできたのでしょうか。そもそも、この問題に取り組んだ動機は……。

「もう十三年前になりますか。初めて教師になった時です。大森第四小学校でしたが、新卒の女の先生がいましたね。二週間かけてクラスの子供たちをみな跳び箱を跳べるようにしたというんです。この話を聞いて、すっかり感動しましたね。『よし、やってみよう』ということになった。これが動機でした」

なるほど。

「跳び箱といえば、斎藤喜博さんが必ず全員、跳べるようにしてみせる、と自信をもって書かれています。だけど、どうして跳べるようにするのか、その技術については、斎藤先生も書いていません。跳び箱を跳ぶ時、両手に体重をぐっとかけ

て身体を持ち上げるようにする。必ず跳べるようになりますよ」

まことに話は簡単である。だが、何人か跳び箱を跳べない子供は必ずいるもの。それは仕方がないことだとされているのが、多くの現場の実態ではないだろうか。跳べなかった子がある日突然、跳べるようになったら、それは大きな喜びを感じるだろう。

「そうです。跳び箱を跳ばせることは、小学校の教師ならだれでも扱ったことのある一般的な問題でしょう。ところが、これまで子供に跳ばせるということがなぜ、教師の常識にならなかったのか、不思議ですね。そこで、これまで日本中から跳び箱を跳べない子供をなくそうと問題提起してきましたんです」

「名人芸」を一般化すべきだ

がっちりした体格。一つの問いかけに、打てば響くように答えがはね返ってくる。教師歴十三年。脂がのってきた時期なのだろう。言葉のはしりから、教育への情熱がほとばしり出るようだ。

おっしゃるように、なぜ跳ばせることが常識にならなかったのでしょうか。

「教師の世界の名人芸は、伝達不可能な部分があるというところで、いわば私的財産にとどまっていた。ちょうど医者と同じですよ。それを教育界の共有財産として公開すべきだと思います。教育実践の中で、共有化する技術をつくり出していく必要があるのです」

教育は臨床医学と基礎医学を兼ねているもの、とよくいわれる。

「問題をごく狭く限定して考えてみましょう。例えば分数ができない子供をどうするか。五年間、一人の教師が研究を続けその成果を発表する。そういうことを積み上げていくことによって、教育科学ができれば、子供はどんなに幸せになるでしょう。優れた先生は、研究の成果を『名人芸』だとして、なかなか一般化しようとしません」

それはどういう意味ですか。「名人芸」だから独占したいのか、それとも……。

「結局、教育研究のシステムが作り出されていないのだと思います。教育の技術、跳び箱を跳ばせるようにする技術。それは思想とか信条の相違以前の技術だと思いませんか」

たまたま話は跳び箱を跳ばせることが中心になったが、同じようなことはいろいろな面でいえるのではないだろうか。

「そうですね。水泳の教え方にしても問題があるようです。全然、水に浮かない、泳げない子供



ができるという。しかし、現実の教育の中では、とべない子供がいてもしかたがないようなところがあると聞く。どうして、そうした技術が伝えられないのだろうか。

「そこなんです、ぼくが言いたいのは、斎藤喜博さんが「一時間で、全員とび箱をとばせられる」とおっしゃった。ぼくもその言葉を聞いて、「それじゃ、オレもやってみよう」という気になったけれど、斎藤先生はその技術を公開されていない。

教育の技術というのは、教師全員の共有財産だと思うんですよ。いままでは、優れた技術をもった先生は、それを一般化しないで、「名人芸」だとしてきた。それではいけないんです。子供は均等に教育を受ける権利があります。技術をひとりじめにしておくのは、子供たちに対してもルール違反ですよ。

ぼくは、このとび箱をとばすことに何年も費やしました。技術が公開されていれば、すぐに教えられたのに。ぼくが、とび箱をとべない先生に、とばせ方を教えたらその先生は自分とはとべないのに、子供たちをとばせることができました。とび箱は、小学校の教師ならだれでも扱うことですよ。みなさんに（とばせる技術を）知ってほしいと思います」

なかなか痛烈な批判もまじえて、向山先生は話してくれた。話しているうちに、だんだん声が大きくなってくる。教育への情熱がそうさせるのだろう。

では、向山先生のとび箱をとばせる技術を公開しよう。

■ とび箱をとばせる向山式技術

(一) とび箱がとべない子は「腕を支点とした体重の移動」ができないためである。

それは、自転車に乗れない子が、乗っている感覚がわからないのと似ている。自転車の荷台をつかまえて走らせるのと同じように、腕を支点とした体重の移動を体験させればよい。

(二) 私は体重移動の体験を、次の二つの方法で行う。

(A) とび箱をまたいですわらせ、腕に体重をかけさせてとび降りさせる。「とび箱をとぶというのはこのように腕に体重がかかることなんだよ」と説明する。通例、五、六回である。

(B) とび箱の横に立ち、走ってくる子の腕を片手でつかみ、おしりを支えてとばせる。体重の重い子は、両手でおしりを支えても良い。だんだんとべそうになるのが、手の平にかかる体重が軽くなることでわかる。通例、七、八回である。

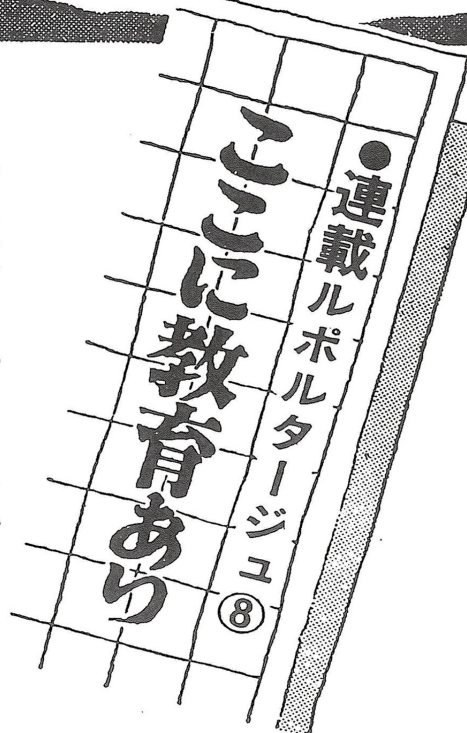
(三) (A)の方法ができない子は、つまり両腕で体重を支えられない子はとべない。筋力の発達がそれ以前の段階だからである。但し相当の肥満児でもできる。私は虚弱児一例の経験がある。

曲に合わせて行進が全くできないほどにリズムが狂っている子も困難である。私が一緒に助走することをくり返し

◇ 昨日、テレビをつけたら、福島さんの母親の姿が目にとびこんできた。

◇ アレッと思ったら、父・母・るみの三人でクイズ番組に出ているのだった。応援しながら見ていた。

◇ 昨日発行の「小二・教育技術」(小学館)の記事です。



子供はだれでも とび箱をとべる

とび箱をとべない子供をな
くそうと問題提起する――



東京都大田区立調布大塚小学校

向山 洋一 先生

「『ここに教育あり』というタイトルには、合わないですよ。とび箱をとばせるのは、教師みんなの課題なんですから。やればできるんだから」

開口一番、がっちりした体格の向山洋一先生は、ちょっと恥ずかしそうに言った。

■教育の技術は、教師の共有財産

でも、とび箱をとべない子供は、どのクラスでも何人かはいると聞く。

「いや、それは、先生が(とび箱を)とばせる技術を知らないからです。ちゃんと教えれば、全員とべるようになります。十五分でもとべるようにしたこともあります」

淡々と、しかし、かなりの自信をもって答えてくれる。いま、向山先生は、五年生の担任である。クラス全員の子供たちがとび箱をとべる。学校中から選りすぐった二十人のとび箱をとべない子供たちを全員、とべるようにしたこともあるという。

向山先生は、だれでもとび箱をとばせることを教えること



子供が多い。テレビはそれだけ子供に悪い影響を与えているわけです。だから見ない方がいい。そして、そのしつけは親の責任ですね。テレビを見る時間が少なく、こづかいも多くなく、塾に行っていない子の方が、持続性がありますね」

向山先生は、社会科が専門である。その研究会にも出て、このとび箱問題もやり、仲間で作っているサークル活動もし、大忙しである。しかし、へこたれることを知らぬという感じで、その殺人的スケジュールをこなしている。歯切れのいい話ぶりは、聞いていても気持ちがいい。

「いま教育界で行っている研究会というのは、自己研修的な意味合いはありますが、本当の研究じゃない。さっきも言いましたが、技術を私有化していて、聞いている人は感心するだけで終わってしまう。医者が病気を治すのと同じように、教師みんなが、同じ方法で教育を行っているように、技術を公開すべきです。」

また、研究会はあまりにもたくさん結論がすぎている。まあ、「子供の創造性を伸ばす」みたいな抽象的で、広いテーマではそれもしかないのかもしれない。なぜ、もっとテーマをしぼって研究会を行わないのか。一つのことにしぼっていけば、深く追究できて、それがやがては「教育科学」となっていくと思うんですがね」

向山先生の教育への問題提起はつきることを知らないようだ。その情熱を本にした。『斎藤喜博を追って』（昌平社）という本だ。授業の実践記録を中心に、向山先生の教育への考えがまとめている。この本でもズバリ物をいっているなかなかおもしろい。

帰り際、向山先生に、ご自分の子供のころ、体育はどうだったか、たずねてみると、ちょっと笑いながら、「いやあ、かけっこが早かっただけで、ほかはにが手だったなあ」

（本誌・中山）

ランダム

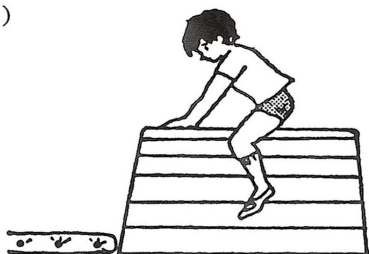
1980. 12. 16 No. 14

調布大塚小5の3学級通信

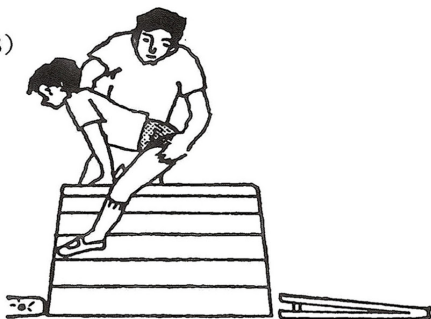
◇ 前号の続きです。

た後にできるようになった障害児」例の経験がある。
鉄棒にぶら下がることや平均台を歩くことをこわがって
できないほどに、身体を動かすことに極度の恐怖を感じて
いる子も困難である。遊びの中で鉄棒にぶら下がるのをこ
わがらなくなってから、できるようになった一例の経験が
ある。

(A)



(B)



■『ていねいさ』と『持続性』が持論

障害児などの子供たちをとばせるのはかなり苦勞があるよ
うだ。一緒に手をつないで走ったり、自分がとび箱のかわり
になったり……。

向山先生の持論は、「いかなる学習にとっても大切なこと
は二点——『ていねいさ』と『持続性』である。」

だれでも子供たちをとばせることができるとはいっても、
やはり、それなりの努力は必要なのである。

低学年は、前述のとおり、筋力が未発達なので、あまり無
理をさせない方がいいという。

ところで、向山先生は、『テレビ害悪論』というユニーク
な考えをもっている。ちょっとあらっばいんですがと前置き
して、

「テレビを見る時間が三時間を超える子供は、忘れ物が多
い。また、活動しないから体をきたえられず、体力がない。
一つのことはできるが、多方面に力を出すことができない。
コマーシャルの影響か、清涼飲料水や甘いものを食べている

ランダム No.90 娘の保育園の文集より

が山場になって、陣痛が最後迄到達しても、まるで駄々っ子がかくれんぼでもしているように、えりこは下りてこなかったのです。結局帝王切開をすることになって、切ってみたらその緒が、えりこの首にまきついて体の方にもまきついていて姿勢が悪くなっており、それで下りてこれなかったという訳だったのです。お母さんのお友達やラマーズ法のことを知らない人にこの次をを話すと「損しちゃったわね」という人が多いのですが、つまり、高年初産だったのだし、結局切ることになるのだったから、最初から計画的に帝王切開することにして、陣痛を経験しない方がよかったあね、となくさめてくれたわけですが、お母さんは決して損しちゃうたなんて思いませんでした。ラマーズ法というのは、そもそも子どもの不自然な産み方に対する批判、すなわち最近のお産の傾向というものが、病院の密室事項になっていて、産婦自身も自らのお産でありながら主体的に係れない、それがよい姓産婦を恐怖に陥れているということに對する批判から出発している方法です。自然な産み方は、子どもにとってもメリットは大きいといわれています。最初の親子の協力がお産を通してあるのだということでも、お産の経過を体験することによって子どもにも、お産のち生きていく上での抵抗力がつくということでも、えりこは産道こそ通らなかったけれども、陣痛の試練は受けられたことになるのですから、

決して損したなどということは次元を異にしていることになりました。陣痛は苦痛には違いないかもしれませんが、そういうことが納得できれば、そもそも自然によって強力につくられている母性、それが耐え忍べない筈はないのではないでしようか。よく、お産を経験した直後の母親がもう二度といやだと感想をもちます。これがあると聞きまして、たが、お母さんはそんな風にはちっと思いませんでした。最後迄自然に産めなくて残念だったな、今度恵まれれば自然を完うしたいな、と思いませんでした。母親に、可愛い子どもを恵まれた直後にもう二度と子どもは欲しくないなどとは、つゆほども思わせないラマーズ法の功績はそれだけ、大きいものですが、父親に自己変革を迫る点も功績大なるものがあると思います。お父さんは、えりこの生まれる頃次のように思っていました。えりこは、「女房と赤ちゃんの陣痛を共にしながら、私は私がかわっていくように思えた。男の子と女の子とどちらがいいですか」と聞かれると私は次のように答えるようになっていた。どちらでもいいです。どちらがいいなんて生まれてくる子に失礼です。五体満足ならいいわよね、と言われると、次のように答えた。五体満足でなくてもいいです。どのように生まれてこようと、私は父親なのです。からすべて受けとめるつもりです。と。まことに、もってそのとおりで、お母さんもよく人にとりながら希望で

恵理子へ 向山浩子

えりこがこの世に生を受けようとした時は、お父さんとお母さんの結婚生活が十年目を迎えていました。だから、えりこは、いろいろな普通とは異った状態でこの世に迎えられたというのと比べてみます。勿論、第一には、えりこは大きな祝福をもって迎えられたということです。お祖母ちゃんなどは、待ち抜いた末の知らせだった。待ちくたびれちゃったよ。という逆説的な表現で喜びを示したほどでした。一方、結婚十年目といえは、出産年令ということではお母さんはすでに若くはありません。細かい注意を払わなければなりません。偶々、お母さんのお姉さんにあたるえりこの伯母さんが、推名町の長橋産婦人科病院の助産婦さんだったので、病院もそこに決め、日常的にも伯母さんにいろいろ相談相手になってもらいながら、えりこがお母さんのお腹にいる間、慎重に日を送りました。食物に気を付けたり、お母さんの職業は本を読んだり机に向かって書きものをしたりする仕事だったたので、運動不足に気を付けたりしたものです。

お産については、どのお母さんも多分そうだと思いますが、直面してからやっと勉強し始めるという状態でしたから、なんら既知事項は

ありませんでした。伯母さんの病院ではラマーズ法という出産方法を採り始めていて、病院としてラマーズ法体罰をとっているのは日本で数えるほどしかないそう。お母さんも初めて聞いたこの方法でえりこを産むことになりました。この方法でお産をするには事前いろいろな勉強しなければなりません。出産のメカニズムをお父さんと一緒に勉強しに行ったり、呼吸法の練習をしたり、妊婦体操をしたりしました。でもこの方法で一番大事なこととは、お産に際してお父さんとお母さんは協力するということなので、通常一般の病院では、お父さんはお産の時にいくら希望しても立ちあうことは許されないとが多いのです。ラマーズ法がお産の革命といわれるゆえんです。

えりこのお父さんは最初逃げ腰でしたが、いろいろ勉強していくうちに少しずつ考えが変わっていったようです。

しかし、最終的な結果としては、お父さんの立ちあいの下で、自然にえりこを産むということについては、残念ながら実現しませんでした。えりこがずうっと逆子だったことに原因が求められそうなんです。毎日三十分以上もうつがせになって腰を高く上げる。逆子を直す体操をして、直ったかと思うと又逆子になってしまふのです。これを何度か繰り返して、臨月には漸く安定したようだったのですが、結局このことがあだになったのだといえるようです。腰痛

ランダム NO 91. 新 保育園の文庫より

を持つていたに違いない、そのこととちつとも性質は変らないのだということです。こぐまの痛々しい園舎をみれば、今年も雨もりを直さなくではならない。去年は畳替え、来年は台所の改造という具合に常にあったらうことが容易に想像がつくというものです。親が困った問題を提起すれば皆で何とかしようということになり園がそれを受けてたち、逆にその時々で園が抱えた問題について親の方も何とか協力しようというのが共同保育園というものでしょう。ひまわりの場合には自己の利益に直接還元されないという点が問題になるかもしれない。これはお母さんが文母会で発言したことですが、おおよそ子育てに關し、教育に關する運動や努力で自己の利益に直接還元されないということは珍らしいことではありません。それは運動で成果を上げるといふのは時間がかゝる上に、教育集団というものが通過集団（一定の年限がたつてしまえば卒業してしまふということ）であることによるものです。だからといってお母さんたちが協力を拒んだら、いままでそのことを承知の上で、しかし次代の子どものための教育の環境がよくなるのであればという熱い気持ちで私わねてきた他のお父さんやお母さんたちの努力を無にしてしまふことになりかねません。その上えりこたちは、前のお父さんやお母さんたちの努力によって獲得された成果に恩恵を受けている面もあることを忘れてはなりません。

わづかなから公的な補助金が下りていること、それは前のお父さんとお母さんたちが努力して獲得してきたものです。又、品川区の保育体制は特に低年令において進んでいるといわれるそうです。それも又、こぐまを始めとする無認可保育園の保育さんたちや親たちが長い間行なってきた運動によって公立の保育体制そのものを底上げすることになったからだといわれている。だから、もし、えりこもこの四月運よく公立に入れることになれば、その時にも運動の恩恵を幾分かは受けることになりそうです。そうしたことを無視する親の人生もあるだろうとは思いますが、その下で生きる子どもはお母さんの考える理想的な育ち方はできないだろうと思つたのです。お母さんは、えりこには人はつながり合つて生きていくということや、人々の無数の努力の上に生きていけるということとやその私われた努力というものに想像力を動かせられるような人間になつてもらいたいと思つていふのです。

お母さんは、以上のことをバカの係りをやり、毎月、父母会に出て運営上のことから見直すにつけ段々そのように考えるようになりました。こうしてお母さんは、小さいあなたを保育園に頼んだりお祖母ちゃんに預けたりして出掛けることが多いのですが、決してあなたを粗末にする意味でそうしているのではないといふことを理解してもらえたらなと思つています。

すかしと聞かれましたが、本当に不思議なくらい、どちらがいいなどと判断したことはありませんでした。こうしてえりこはこの世に生を受けた訳です。

ところで、お母さんはえりこが生まれる時にも生れた後にも仕事はやめませんでした。なぜかといえは、詳細な説明は紙幅の都合上他に譲るとして、こゝでは、諸般の事情からやめる訳にはいかず、何よりもお母さんの生き方の問題として、働かざるをえないのだとだけ云っておきましよう。そこでえりこは保育園に行くことになりました。こぐまの保母さんたちは、皆感じがよく良心的で、保育に熱心な印象でしたのでよかったです。思ったのですが、しばらく通園するうちに、共同保育園というのは実に大変だということがわかったのです。お父さんもお母さんも仕事をもっていて忙しいからこそえりこが保育園に行くようになったのに、預けるが故に伴う仕事や活動が非常に沢山あって、忙しさが倍加したのです。お母さんの研究上の専門的な言葉でいえば、学校づくりの原初形態というものがそこにはあって、学校の自治とか民主化ということが今日の学校のあり方をめづつて向い直されているのですが、自治とか民主主義とかそうしたものはあるでそれを免うするのには実に大変なことなのだというのが、先ずもっての実感でした。

無認可の共同保育園の一般的なりたちは、要

は公認の保育園が余りに少ない為に、公認園に預けられなかった親たちが寄り集って、親たちの中から保母さんを選出して収入を保険し合うとか、あるいは皆がお金を出し合って保母さんを雇って、子どもの保育を依頼するということが原理になつていていえるでしょう。そうである限り、親は保育のことばかり気を配つてればよいという訳にはいかず、運営のことも含めすべてのことを皆で計画し皆で決め、皆で実施していくというまさに直接民主主義の原理がそこでは貫かれなくてはならないことになります。こぐまは来年度二十周年を迎えるということですから、えりこたちが入園した時にはそれなりの体制と陣容が整っており、自分たちが作った保育園という実感が持てないばかりに、一定の費用を出せば子どもをとにかく安全に預けてもらえるという程度の認識しか持てないで入園してしまふのです。しかし考えてみれば無認可というものは、公的補助がないに等しいことと同義なわけで、毎年毎年が二十年前と同じように園を成り立たせる為に父母も保母も協力し合わなかったら、つぶれてしまうことになるものなんだということなのです。

ひまわり保育園のことも、こゝろ二三年の間に問題が起きて来たとはいえ、そしてつつましく生活している親たちの集団にとってはいくらか法外な課題だとはいえ、日常的な運営費を工面するということのほかに、いつだって特別な課題

ランダム

NO. 92

1982.3.18

6の3

その後の恵理子

- ◇ 娘の恵理子のことについて書くと約束しながら日がたち、その間に何度かさいそくされながらも今日になってしまった。

昨日は、母親の長々しい文を載せたのであるが、本日は私の雑文である。

- ◇ テレビは全くと言ってよいほど見せてない。テレビの位置を移したのから始ったわけであるが、私の生活も変った。私自身がテレビをほとんど見なくなつた。どのくらい見なくなつたかというところの一个月間、全く見てない。三学期が始まってから一、二度程度である。その分、本代が多く取った。乏しい小遣いに代わりこたえる程度の本代が出る。新書版の安価版のがあるので助かるが、三学期になってどのくらい本を買ったかというところ200冊ぐらいである。読まない本がどんどんたまっていく。

- ◇ 恵理子は、「人のまね」をすぐにするらしいし、また「人のまね」が上手らしい。保育園からの便りである。

テレビを見させてないのだから、恵理子にとって「遊ぶ」というのは、「他人のまね」のことなのである。「初めての動き」に出会うと、じっと観察している。必ずまねをする。

「遊ぶ」という言葉の意味は「まねび」であり、「まねをする」というのが学習の語源であることがよくわかる。

- ◇ では、現在、「どんなまね」が多いかというと「ジージーを書く」と「本を開く」ことである。父親も母親もこうしている時が多いので、月齢10ヶ月ぐらいからまねを始めた。

現在は鉛筆を持って、(つまり正しい持ち方にかなり近い持ち方で持って)線を引き、いちいち何か意味不明のせや長い音声を発して説明してくれる。「じょうずだね」とほめるとかなり満足した様子を次を続ける。この「ジージー」を書く作業はかなり好きであるらしく、ほっておくと鉛筆をとり、本の上、タタミに書き始める。

- ◇ 本を用くのも好きである。これも10ヶ月位の時から興味を示した。歌が書いてあるページは母親が歌ってあげていたため、そのページに存在と必ず歌うことを要求していた。「おとちやのチャチャチャ」と「春よ来い」と「みなまつり」が好きのようであった。自令は、体をゆすってリズムをとっているのである。

最近は何でもよいらしく、本があると用いて1ページ1ページ(といて2,3ページくっついているのだが)めくっている。

- ◇ 筋力低下がかなり言われているため、筋力はまだえようと思っている。階段を登らせるトレーニングは意図的にするようにしている。甘いものは与えていない。清涼飲料水は飲ませたことがない。

- ◇ 当然のことながら、オモチャで遊ぶのも好きである。妹のいる供たちが来ると仲間に入ろうとするし、ボール投げもやろうとする。コマもまわすまねをするし、積木も一個ひとつたてるようにあった。

過保護状に配慮なのであるが、保育園にいるためある意味で安心である。泣かされるより泣かせてしまうことが圧倒的に多いらしい。

10ヶ月位、月齢の大きい子と「オモチャのとりあい」をすると取ってしまって相手を泣かせ自令はニコニコしてさうい。

- ◇ 父親がたっているの、デブにたらないよう気をつけたいといけないうちでいる。喰い気もすごいのだ。

以上、親馬鹿でした。

だ！」って。それまで父から頭ごなしに反対されたことは一度もなかったんです。子供の時から「とにかく好きなことをやりなさい」「好きなことだったら、苦勞を苦勞とも思わないから」と言われて育っていったんですね。ところが、父に「やっとうりたいたことが見つかった。行きたいところが見つかった。ケニア行つて音楽修業してきたいです」って言つたら、「絶対ダメだ！」って(笑)。

佐桑 それは理不尽を感じますよね。
向山 しょうがないですよ。たつた一人の娘ですもん。「喜んで！」とはならないですよ。

佐桑 恵理子さんはそれをどうやって説き伏せたのですか？
恵理子 家出同然に旅立ちました。

佐桑 お母さんは？
恵理子 母は「あ、そう。行きたいなら行けば」「でも、1週間に1回は連絡をしない」といった感じで、肝がすわってましたね。独立精神が旺盛な人です。

佐桑 でも、お父さんとしてはショックだったでしょうね。
恵理子 父には手紙を残していきました。

佐桑 泣けてきそうなお話ですね。
恵理子 でもそのとき父は、その手紙を読まなかったらしいんです。

向山 ただただ反対する気持ちから先に立つて感情的になっているんだから、読めないよね。

恵理子 いつ読んだの？ 10年後くらい？

向山 何年も経ってからだね。ただ反対はしていたけれども、どんなところへ行つても、したたかにやつてくる子だとは思っていたんです。

佐桑 生きる力はある子だと。
向山 はい。ただ、やっぱり命にかかわるような危険はないのだろうかとか、日々心配して多少はテンションが低くなっていたかと。

恵理子 私がニヤティの修業をした村はアレゴ村っていうんですけれども、村の人たちみんなが本当に大事にしてくれて。何か困ったことがあつても守ってくれるんです。

佐桑 「本当に好きなことなら苦しくても頑張れる」という、お父さんがおつしやつていた通りに、恵理子さんは困難を乗り越えながら言葉も(スワヒリ語やルオ語)、ケニアの伝統音楽も習得していった。

向山 マラリアにも4回かかったし。
恵理子 アリも食べて、ね。

向山 トイレのないところで、トイレもして。
恵理子 水くみも、薪拾いもして。でも、そうしたことは、たしかに苦勞とは思いませんでした。

佐桑 だからやつぱり、好きなことを見つけるということが、親としては子供に一番してほしいことなんでしょうね。

向山 それは、本当にそうですね。

「好きなことをやりなさい!」と言っていた父が ケニア行きだけは「絶対ダメだ!」って。

テレビとチョコレートは 禁止でした!

佐桑 さて、向山先生は教師としてたくさんの子供たちを伸ばしてきましたが、自分の子育てとなると、意識や考え方は違いますか？

向山 娘に対して「子育てをする」という意識はなかったですね。「こんな人間に育つてほしい」という思いより、「自分の好きな道を選んでくれたらいいな」と。ただ一つ、恵理子が生まれて間もない頃から考えていたのは、本を読んでやろうと。私の小さい頃は、まわりに絵本などありませんでしたが、夜、布団に入つて寝るときには、父親が必ずいろいろな物語を話してくれた。それが楽しみでもあり、父親との触れ合いという点でも印象に残っていました。だから、同じことをしてやりたいと考えたわけなんです。

恵理子 母や父の読み聞かせは、入眠前の儀式というか、習慣の中に組み込まれていましたね。

向山 小学生になつても毎日続けていました。ただし私は水曜日だけ担当。後は妻がやつてくれていました。

恵理子 3冊も4冊も好きな本を選んでは、母に「これ読んで」とねだっていたようすです。でも印象に残っているのは父の回ばかりで(笑)。父は面白おかしくドラマ仕立てにして、大げさな脚色をつけるんです。それ

が私の気に入っている本だと、母に何度も読んでもらつていて一言一句まで覚えていたから、「違うよ、お父さん! こうでしょ!」と言つて、いちいち訂正していたらしくて。

向山 そうだ! 訂正された覚えがある。
恵理子 父が、怖いオバケの話とかを始めると、逆に寝られなくなったほどです。父は、お酒を飲んで酔つ払つて帰つてきても、水曜日には絵本を読んでくれたのですが、読みながら父がうとうと寝ちゃうときもありました。そんなときは、逆に私が父に読み聞かせをしたり。

佐桑 何年も読み聞かせを続けていたら、いつの間にか、お子さんが自分で声を出して本を読めるようになっていたわけですね。どのような本を与えていたのですか？

向山 小学生になつてからは、娘と一緒に書店へ行つて、「15分間、好きな本を選んでいいよ」という形で選ばせていました。

恵理子 父からは「こんな本を読みなさい」とは一切言われませんでした。それが本を好きになった理由かもしれません。漫画、雑誌、図鑑、小説……、活字なら何でもいよと。

佐桑 親としてはつい、行儀のいい本を読ませたくなるものですが。
恵理子 父も漫画好きです(笑)。

向山 私は、教育的に悪いと大人たちが考えている本も、子供は読んで

わが子を伸ばす 褒め方・叱り方・ 声のかけ方

カリスマ教師・
向山洋一先生の
子育て術



一人娘がケニアの奥地に
行くと言いだした

佐桑 恵理子さんは、世界初のニャティティの女性奏者です。22歳でアフリカ音楽に魅了され、23歳でケニアの音楽の虜（も）になり、24歳のとき、ついにはケニア奥地の村までたった一人で修業に行かれたわけですが、お父さんとしてはいかがでしたか？
向山 もちろん大反対でした。一人娘ですもん。アメリカやヨーロッパならともかく、ケニア。しかも、電気も水道もない奥地の村ですよ。ケニアの首都ナイロビから夜行バスで12時間、その後、徒歩で6時間とか、奥地のそのまた奥地です。

恵理子 父は「ダメだ！」「絶対ダメ

アフリカの音楽に魅了され、
単身ケニア奥地の村で修業し、
現地でも限られた男性だけに演奏が許されている
ニャティティの世界初の女性奏者となった
アニャンゴさん。彼女は、カリスマ教師として
退職後も多くの先生から圧倒的な支持を得ている
向山洋一先生の一人娘・恵理子さんです。
まさに「好きを極めて自立させる」という
最高のゴールを達成した
向山家の子育てを聞いてみました。

(聞き手＝佐桑 徹さん)

たわけでもありませんし、男の子が荒れているのは違って、そんなにヒドイとは思っていませんでした。ただ、女の子ですからね。ほとんど毎晩のように外出するとなれば、やはり心配にはなりますよね。

恵理子 中学3年生で横浜アリーナのライブに行ったとき、横浜駅までついてきたもんね？ 覚えてる？

向山 それは覚えてる。

佐桑 でも、反対はしなかった。

向山 心配だったけれども、ごく当たり前の生き方をしている、普通にまともな人間だと思っていたので。そんなに外れたことをするとは思っていなかったですね。

佐桑 「こんな夜遅くにどこに行くんだ」という親の言葉が売り言葉になり、親子ゲンカが始まることもまありがちですが。

向山 そういふゲンカはなかったね。

恵理子 心配で、少しお酒の量が増えたかも(笑)。でも、頭ごなしに押さえつけたり、禁止したり、変えさせようとしたりといったことはなかったです。高校生になってからはライブについてくることもなかったです。あ、だけど高校生のときの夏、友達と合宿中に、あまりに暑くて近所の学校のプールで泳いで補導されたことがあって……。そのときはさすがに叱られました。

向山 警察沙汰はさすがにね。

佐桑 親に対して汚い言葉をぶつけた

るようなこともなかった？

恵理子 ないです。でも父と違って母は、結構細かいことまで言うタイプだから、女同士で言葉の応酬というのはありませんね。

向山 僕から見ると壮絶ですよ。近寄りたくない(笑)。

恵理子 お父さんはその場から、さーっと逃げていきました(笑)。

向山 触らぬ神に祟りなし。

絶対にできる！ その言葉が、生きる力に

佐桑 その頃、娘として、お父さんのことはどう思っていたのですか？

恵理子 高校2年生のとき、偶然なのですが父の書斎に行き、父が書いた本を初めて読んだんです。その本には「こういう気概とこういう思想を持って、教師という仕事をやっていくんだ」ということが書いてあった。親というよりは一人の熱い大人の生きざまがそこに刻まれていて、



Anyango(アニヤンゴ・向山恵理子)さん
ケニア伝統弦楽器ニャティティ奏者、
日本ケニア文化親善大使

1981年、向山家の一人娘として生まれる。青山学院中等部・高等部・大学を卒業。アニヤンゴはルオ語で「午前中に生まれた女の子」という意味。ニュースウィーク誌の「世界が尊敬する日本人100人」に選ばれる。CDに「Anyango Kenya Best」「Savanna」など、著書に「夢をつかむ法則」「魔はニャティティ 舞台は地球」など。



向山洋一先生

TOSS代表、TOSSランド主宰、向山塾塾長

1943年生まれ。東京学芸大学社会科卒業後、小学校教師に。NHK「クイズ面白ゼミナール」の教科書クイズの出題や通信教育の企画・出題に携わる。全国の優れた教育技術・方法を集め、それを追試・修正し、教師の共有財産にする「教育技術法則化運動」を立ち上げ、30年以上にわたり教育運動の最先端を切り開いている。多くのテレビ番組で特集された「跳び箱は誰でも跳ばせられる」など教師の指南本となる著書を数多く出版し、全国の教師たちの師として現在も精力的に活躍中。

TOSSとは

Teachers' Organization of Skill Sharingの略。向山先生が1983年に立ち上げた「教育技術の法則化運動」を前身に2000年に誕生。授業・教育にすぐに役立つ教育技術・指導法を開発し、集め、互いに追試し、検討しあって自らの授業技術を高め、全国の教師の共有財産にしようと努める日本最大の教育研究団体。会員1万人を超える。

父という人間に初めて触れた感じがしました。それ以降、反抗期もパタッと終わつたんです。

佐桑 いい話ですね。

恵理子 父はいつも、「恵理子なら絶対にできる」と繰り返して言ってくれていました。今の自分があるのもそのおかげだと思います。

向山 「恵理子なら絶対にできる」と言っていていたら、ケニアへ行ってしまう。それは完全に想定外でした(笑)。私も妻も「娘は親のもの」という考えはありませんでしたからね。それぞれ一人の独立した人間ですから。だから、やりたい道、生きたい道に対して、あれこれ言ったりすることはありません。ただ、さすがにケニアとは(笑)。でも、結果として自分の夢を着実にかなえているわけですから、それは嬉しいですし、ありがたいことです。

佐桑 恵理子さんは、昨年の夏、お母さんになりましたが、ご自身の子

育てても、読み聞かせをしようと考えていますか？

恵理子 生後1カ月のときから読み聞かせは始めています。それと、おなかにいるときから聞いていたからか、ニャティティが好きなんですよ。どんなに泣いていても、ニャティティを弾いたら泣きやんで、コテッと寝ちゃうんです。

佐桑 どんな子に育ってほしいですか？

恵理子 一番その子らしく、一番その子にとって花開けるように。でも、そのためには、まずは親である自分たちが自分たちらしく、花開けるような生き方をしていくことが大切なのではないでしょうか。そのことを言葉ではなく、私の両親がそうだったように生きざまとしてわが子に伝えられたら素敵だなと思います。それは夫ともよく話をしています。

佐桑 どこの国へと羽ばたくのか、今から楽しみです(笑)。

みたほうがいいと考えています。悪い本は、子供だつて嫌になつてしまふことが多いからです。

佐桑 それだけ、お子さんを信じているということですか？

向山 わが子ということよりも、人間を信じていますね。読んでいううちに、悪い本は自然淘汰されていくものです。

恵理子 何を読んでもいいという雑種類の父に対し、母は、「これぞ」という一冊を読みなさいという一冊入魂の考えでした。小学校2年生か3年生くらいのときに渡されたのが、吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』です。

佐桑 今も話題になっている、まさに読み続けられている本ですね。お父さんの教えで多読乱読もできたし、お母さんの教えで熟読もできた。とても素晴らしい読書環境です。ただ、子供は熱中すると、食事の時間になつてもご飯を食べてくれなかったり、寝る時間になつても読み続けたりすることがあります。生活習慣や生活リズムが崩れないよう、何かルールは作りませんか？

恵理子 わが家には特別なルールはありませんでした。でも、テレビとチョコレートは禁止でしたね(笑)。

向山 テレビは「あまり見ないほうがいいよ」とは言ったかな。

恵理子 そもそも両親がほとんどテレビを見ずに本と向き合う姿を見せ



聞き手

佐桑 徹さん

経済広報センター常務理事・国内広報部長
1958年生まれ。慶應大学経済学部卒。経団連事務局長、東京新聞記者を経て、1998年より経済広報センター勤務。環太平洋大学客員教授。産業教育への貢献で文部科学大臣賞受賞。ESD活動支援企画運営委員会委員(文部科学省・環境省)。

ていたので、私も自然と本のほうを向いていました。祖母と一緒に暮らしていたこともあり、朝食や夕食の時間、お風呂の時間、就寝などの時間が崩れるようなことはありませんでした。

向山 チョコレートや清涼飲料水など、砂糖や甘味料が入ったお菓子や飲み物は、子供の脳の作用を妨げると考えていたんです。

恵理子 でもそれは小学生まで。中学からは自分の判断に任せられていました。それで炭酸飲料を口にしたらすごくおいしくって。中学時代はレモンスカッシュにはまっていた。でも、大人になった今でもチョコレートだけは苦手というか食べられません。

水色に縁に……

娘の髪の色が毎日変わった

佐桑 恵理子さんは中学受験で志望校すべてに合格したと聞いていま

「恵理子なら絶対にできる!」と育てたらケニアに。
自分の夢を着実にかなえているのは嬉しい。

す。向山先生は、家ではどんなふうに勉強を教えていたのですか？

向山一緒に机に向かつて勉強を教えたということは全くないです。

恵理子勉強の中身そのものは教えてくれませんでした。勉強の仕方は教えてくれました。たとえば、問題集の使い方とか。

向山ポイントは、あれもこれもと手をつけるのではなく、一冊を全部やり切ること。塾の分厚い問題集であれば、偶数番号か奇数番号だけでもいいから最後までやり通す。そのとき、できた問題とできなかった問題がわかるよう印をつけ、できなかった問題は2周目でもう一度やる。それでもできなかった問題があれば3周目でもう一度やる。

恵理子娘から見ると、父は子育てに限らず仕事の仕方とかもすごく一貫していて、細かいことは全然、口出ししない。「やり方」「考え方」「原理原則」だけを最初に示して、後は任せるというスタイルでした。

向山原理原則ということでは、例えば「きちんとこなす子」が、要するに「やる気を持つて取り組める子」なんです。そういう子供たちは小さい頃から、丁寧に子育てがされてきたはずなんです。

佐桑丁寧な子育て、ですか。

向山ノートをまとめるにしても、考えをまとめるにしても、スピードより丁寧さを優先させる。教科書や

問題集も一冊を丁寧に最後までやり切る。親御さんとしては、ついじれっなくなつて「もっとスピードアップしなさい!」と口にしたくなるところですが、丁寧に一つ一つやれば、確実にできるということをまずは重視していいのです。

佐桑恵理子さんは、お父さんから叱られた記憶がほとんどないということですが、反抗期もなかったのですか？

恵理子中学に入つてすぐというか、12〜13歳という多感な時期に夢中になれるものに出合つちやつたんです。パンクロックでした。自分たちでバンドをつくつて活動をはじめ、のめり込みました。思春期を迎えたら誰でも感じるものだと思うのですが、漠然とした世の中の理不尽さみたいなものに対する憤りや戸惑いに押し潰されそうになつて……。今日は水色、次の日は緑、というように毎日髪の色を変えて登校したこともあります。

向山あの学校でなければ、停学になつていたかもしれません。

恵理子もっとも、私が卒業した後、いくらなんでも向山さんの髪形はということになり、校則が変わることになったみたいで、先生にも父にもずいぶん心配させたと思います。

佐桑お父さんとしてはどういうふうに見守つたのですか？

向山お酒やタバコに手を出してい

「第一子誕生」

私は君に出逢えてたいへん幸せです。娘へ父より
水野 正司

1. これが「父親」というものか

当時向山氏は37歳。1981年と言えば、「向山式跳び箱指導法」が発表された年である。ご承知の通り、これは単に指導法を発表しただけのことではない。「跳び箱を跳ばせることが、どうして教師の世界の常識にならなかったのか」という問題提起を引っ提げて学校教育の世界に巨大な問題提起をした年である。いわゆる「跳び箱論争」だ。

そして、それと共に「教育技術の法則化運動」が始まる。加えてこの年にはNHKの「クイズ面白ゼミナール」の放送が開始される。向山氏はその編集委員もされていたのだ。

超多忙のこの時期に、公立小学校37歳男性教員が、これほどまでに相方の出産に寄り添い、共に勉強し、協力し合っていることに驚きを隠せない。

かつて「イクメン」という言葉が流行ったが、そんな言葉では納得できない深い愛情を感じる。妻への、我が子への、そして、人間に対する愛情である。

この一連の通信を読み、教室の子どもたちは何を感じただろう。「先生」の忙しさなど、とっくに知っている子どもたちだ。忙しさは「先生」の背中にある。通信には違うものがあつた。それは「父親」である。《そうか。これが父親というものか》という描写が繰り返されている。子どもたちは、重く、熱く、尊い場面を共有したのだ。

2. 向山夫妻の子育て方針

私は現在62歳である。50歳頃から「子育て」に関する勉強を始め、これまでに1000冊を超える子育ての本を読んで来た。支援活動などとして、乳児や母親にも接して来た。そうやってようやく人様にアドバイスができるようになって来た段階である。

今回、改めて1981年の「ランダム」を読んで驚いた。37歳の向山氏の子育てに関する知見は、現在の脳画像解析による研究結果やエコチル調査のエビデンスなどとびったり重なるのである。

たとえば「ランダム」No.23に向山夫妻が子育てにおいて「気をつけたこと」が三つ書かれている。「母乳」「テレビ」「言葉がけ」である。どれも乳児の発達に影響を与えることがわかっている。

少しだけ解説をさせていただくと、たとえばテレビなら、向山氏は「音を消す」という点にこだわっている。これは乳児の立場になってみることで、その意味がわかる。乳児は一日の多くを天井などの上を見た状態で過ごす。移動することはできない。

しかし、聴覚は発達している。常に耳を澄まして部屋の中にいる母親や父親の気配を感じている。乳児は耳を頼りに信頼者との双方向のやり取り（愛着形成）をしようとしているのである。

それにしても、どうして向山氏は「音」の影響を知っていたのだろうか。本で知ったのか、それとも出産教室で学んだのか。

それらの影響もあったかもしれないが、

《子どもの立場に立つ》という教師としての向山氏の日常的想像行動がそうさせたのではないかとも考えられる。

3. 日常的想像行動

「ランダム」には浩子氏が娘へ向けて書いた手紙も掲載されている。

お母さんは、えりこには、人はつながり合って生きていくということや、人々の無数の努力の上に生きていけるということやその払われた努力というものに想像力を働かせられるような人間になってraitたいと思っていますのです。

浩子氏はこの手紙を、仕事と子育てを両立させる中で、自身の経験を元に《いま伝えたい》という気持ちを込めて綴っている。この文章に研究者としての浩子氏は居ない。娘の人生を思う「母親」の姿が、熱く、率直に、綴られている。

しかし、敢えてここに科学的な目を向ければ、この「想像力」とは発達心理学でいう「心の理論」である。「心の理論」とは、他者の考えや感情を理解したり、推測したりする心の働きを指す能力のことで、発表されたのは1978年である。当時の最先端の理論と《親心》が結びついていることに私は驚く。

ちなみに、現在では「心の理論」を発達させる仕組みが解明されている。「心の理

論」は脳の実行機能（前頭前野を中心としたネットワーク機能）であり、ここを発達させるためには、①好奇心を大切にすること、②自発性を大切にすること、③干渉も放置もしない《ちょうどいい》対応を心掛けることなどが重要なのである。

これはまさに「向山家の子育て」と同じである。しかも、ニュージーランドのコホート研究によって、実行機能の高い子どもは大人になった時に困難を乗り越える力を発揮でき、健康を保ち、犯罪などに巻き込まれる可能性が低いことが実証されている。これはまさにアニャンゴの人生ではないだろうか。

それにしても驚く。洋一氏も浩子氏も、どうしてこのような見識を持つことができたのだろうか。そのヒントは次の言葉にあるように思う。

どのようにうまれてこようと、私は父親なですから、すべてをけとめるつもりです。

向山氏は「ランダム」で、浩子氏は手紙の中で洋一氏の言葉を紹介する形で、この言葉を共有されている。

この言葉を発している向山氏の視線の先は、お腹の中にいる赤ちゃんだったのではないだろうか。その命の鼓動を想像しているからこそ出た言葉なのだと思う。教師として《子どもの立場に立つ》という日常的想像行動の日々から、必然的に生まれた言葉なのだと考える。



1 月特典

No.14 | 2025年1月

向山洋一 教育資料

1981.1.31 「第一子誕生」

私は君に出逢えてたいへん幸せです。娘へ 父より

発行日 2025年1月3日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台2丁目4番12号



谷和樹の教育新宝島

<https://shintakarajima.jp>



向山洋一公式サイト

<https://mukoyamayoichi.com>

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用するを禁じます。